

学校名：横浜市立永田小学校

担当：5学年

氏名：船山 美穂

1. 今回の研修における目的やねらい

自分が現地に行って、実際に見たり聞いたりすることができることはもちろんであるが、さらに現地で見聞きしたこと、体験したことを教材として、どのように子ども達に伝えていくかを研究することができるがこの研修の大きな魅力であると感じている。これは、私一人でできることではなく、現地のタンザニアで出会う人たち、この研修と一緒に参加する仲間（教職員）との出会いにより、さまざまな考え方を知り、深め、視野を広げるきっかけになることを期待している。異なる立場、地域、校種の人との交流の中で、考え方や表現方法を知り、自分自身も一緒に高めていきたい。

2. 目的やねらいがどのくらい達成されたか

事前研修を受け、現地・タンザニアに行く前までは「タンザニアに行ったら、この研修の答えが見つかるはず！」とどこかで思っていた。しかし、タンザニアから戻ってくると「答え」ではなく、「課題（問い）」が増えていた。それは、私一人で考えるととても大きく重い課題（問い）で、どうしたらよいか分からなくなる。しかし、そのような時に研修の日々のふり返りの記録を見返してみると、同じ10日間を一緒に過ごした仲間の思いや考えがたくさん詰まっていて、本当に勉強になるし、励みになる。現地での研修で見たり聞いたりしてきたもの、そしてタンザニアで得た「課題（問い）」をもとに、もう少しじっくり向き合いたいと思う。

3. タンザニアから学んだこと

「日本はどうですか？」「あなたはどうですか？」と問われ、考える機会を与えられたように思う。

10日間の研修を通して、タンザニアのダルエスサラームやモシの街の様子や学校や各施設の環境・施設、プロジェクトの内容や現状などを自分の目で見たり、直接聞いたりすることができた。そのたびに「日本だったら…」「私の学校だったら…」などと、自分の“ものさし”で計り、「もっとこうしたら良くなりそうだけど…」と考えてしまっていることに気が付いた。それは、あくまで私の価値観であり、タンザニアの人々が必要と感じていなければ単なる押し付けでしかないのかもしれない…と、考えれば考えるほどもやもやした気持ちが増すばかりであった。結局、そのもやもやは晴れることはなかったように感じるが、そこから徐々に「日本はどうなっているのだろう？」と日本に目が向くようになった。そして、日本についてまだまだ知らないことが多いことに気づいた。知らないことに恐怖や不安もあるが、逆にわくわくしてきたのも確かである。「タンザニアのことも、日本のことも…もっと知りたい！」と思う。“知る”ことの楽しさ・大切さを実感している。

4. 今回の研修経験をどのように教育活動に活用しようと思っているか

この研修を通して感じた“知る”ことの大切さを、子ども達にも伝えていきたいと思う。私が見たり聞いたりしてきたものはタンザニアの一部であることを踏まえ、私が感じたタンザニアの様子を少しずつでも子ども達に伝えられたらよい。そして、クラスの子子ども達が「今、タンザニアではこんなことをしているかな…」とふと思い浮かべられるようになったら嬉しい。特に農業の分野については、学年で取り組んでいる米作りともリンクする部分があり、子ども達にとっても身近に感じられることが多いと考えられる。タンザニアでの米作りに携わる人々（現地の人はもちろん、日本人スタッフも同様に）

の姿は、村で過ごした時間で学ぶことが多かったため、ぜひ知ってほしいし、そこからさらに他の国や地域に広がるきっかけになるのであれば、それほど嬉しいことはない。また、子ども達がタンザニアの現状を知る中で、たくさんの日本人がさまざまな形でタンザニアに携わっていることも伝えていきたい。そこにどんな思いを持っているのか、その思いがどのようにつながっているのか…私が「素敵だ！」と感じた部分は必ず伝えていきたいと思う。そして、子ども達にとってタンザニアやアフリカ大陸の国々が少しでも近い存在になってほしい。

5. 今回の研修に参加してよかったことや、よりよくするための提案

研修と一緒に参加した仲間（教職員）はもちろん、日本国内、さらにタンザニアでたくさんの人と出会うことができたことに、本当に感謝している。参加した仲間の男女比や校種もバランスがよく、活動しやすかったと思う。

事前研修の中で、訪問先の学校でタンザニアの子ども達に聞きたいことがいくつか出された。研修に参加する一人ひとりの授業計画や目的やねらいが異なることもあり、聞きたいことも各クラスで用意したプレゼント（手紙や折り紙の作品など）もさまざまであった。これを共有する時期が夏休みに入ってからだったため、各学校に戻して修正することが難しかった。授業計画を立てる時期との兼ね合いもあり、簡単なことではないが、もう少し早い時期に相談することができても良いと思った。

さまざまな施設等との関係もあり、とても難しい点であると思うが、もし可能であるならば研修の時期はもう少し早い方が有り難い。日本に戻ってきてそれほど間をおかずに授業が再開したため、落ち着いてタンザニアのことを考える時間がなかなかもてなかった。

6. 海外研修での役割（各担当や日直）を振り返っての感想・提案など

役割分担に大きな問題はなかったと思う。若干、仕事の内容に偏りがあったかもしれない。特に会計係は、最初から最後まで（帰国後も）常に緊張状態が続いていたのではないと思う。御蔭でとてもスムーズに行えたので、感謝している。

7. その他、研修全般を通じての感想・意見など

一番は、日本・タンザニアでたくさんの方のお力添えのもとに組まれた充実の内容のこの研修に参加させていただくことができたことに感謝している。この仲間とタンザニアに行くことができ、たくさんの方に出会うことができたことができたこと、本当に有り難いことである。だからこそ、この研修で得たものを無駄にはしていけないと気を引き締めて取り組んでいかなければならない。

研修に組まれていたさまざまな訪問先も、実に多彩で個人では決して訪れることはできないのではないかと思う貴重な経験であった。そして、この研修にJICAスタッフの方が常についてくださったことも安心して参加することができた大きな要因である。

8. 今後の本研修参加者へのアドバイスなど

私が最も痛感したことは「先延ばしにせず、その時にやる！」ということである。今回の場合は、書類を整えることとともに予防接種から始まった。「もう少ししてから…」は、後々焦りを招くだけで、良いことはなかった。これは、現地での研修中でも同様である。その時に感じたこと、見たり聞いたりしたことはその時に残しておかなければ、次々にたくさんの刺激を受けながら流れて行ってしまふ。そして、日々のふり返りや記録なども、メモ程度でも残しておくことができるとよいと思う。

実際に研修に参加した先輩や事前研修で講師をしてくださる海外協力隊経験者の方々のナマの声はとても貴重で、またとても励まされた。

9. 各訪問先等の所感

日 時	テーマ	所 感
8月10日(月)	日本からタンザニアまでの移動中および現地到着	前日の9日(日)の20時頃に空港に集まり、出発前の最終確認・現状報告を行った。そわそわした気持ちの中で「いよいよ出発!」と期待が高まる一方、「10日後に日本に戻ってきた時に自分は何を考えているのだろう…」という不思議な感覚になった。また、乗り継ぎのドーハ空港では、その広さと人の多さに驚いた。タンザニア・ダルエスサラームに到着してからは「本当にアフリカ大陸に上陸した?」と思ってしまうほど、私の想像を遥かに超えて活発に活動している街の様子に、「見逃してはいけない!」とあちこちが気になってしまった。
8月10日(月)	JICA タンザニア事務所表敬研修ブリーフィング	長瀬所長より、実りある研修になるよう心構えなど話があった。「日本の子ども達がタンザニアを感じられるように…架け橋になってほしい」という言葉が印象的であった。また、安全情報について、都市部では一般犯罪が増えているため用心を怠らないように、再度確認があった。気を引き締め直すきっかけになった。
8月10日(月)	JICA 所員との懇親会	所員の方に、食事をしながら話をうかがうことができる貴重な時間だった。特に、ご家族のことなど、研修の中ではなかなか聞くことができない現地スタッフの方の実生活(裏側)を聞くことができた。
8月10日(月)	本日のふりかえり	予定されている研修の内容をこなせることが、いつの間にか当たり前のような感覚になっていたことに、はっとした。たくさんのスタッフの方のサポートがあって成り立っているものであることに改めて感謝したい。
8月11日(火)	JICA タンザニア事務所研修ブリーフィング	タンザニアへの支援の概要、教育セクター、電力セクター、農業セクター…など、担当の方から話を聞いた。さまざまな分野で日本人がタンザニアの人々と力を合わせて取り組んでいることを知った。特に教育の分野では、女性が教育を受ける現状や卒業後の様子など興味深かった。見学に行くことができるので楽しみが増した。
8月11日(火)	本日のふりかえり	たくさんの日本人がタンザニアの国にかかわっていることを知り、驚いた。農業の分野は、授業でも取り入れたい内容の一つである。今後、実際に農業に取り組んでいる現地の方にも会うことができるので、本音を探りたいが、そのインタビューの仕方は十分に練らなければならないと感じた。 日本の自分のクラスの子ども達にハガキを送った。
8月12日(水)	キリマンジャロへ移動	夜も明けきらない中、朝早くにホテルを出発し、空港へ向かった。ダルエスサラームの中心地から空港へ向かう道、対向車線を走るバスはすでに満員であった。混雑を避けて5時半ごろから出勤する人が多いとのこと。国内

		線で移動した先のキリマンジャロは、自然が豊かで「動物に遭遇するかも…」と期待してしまうような環境だった。真っ直ぐの道、広い空に気持ちも緩む。
8月12日(水)	キリング中等学校 赤木隊員活動視察	初めての学校訪問に緊張した。校長先生のご挨拶、訪問のサインをして、教職員の方との顔合わせがあった。その後、校内見学(敷地内の隊員の家も)が行われ、学校の敷地の広さに驚いた。赤木隊員の数学の授業を参観させていただき、子ども達と一緒に授業を受ける。ノートの書き方など、指導が行き届いている印象を受けた。地球を題材にした問題は難しかった。
8月12日(水)	モシへ移動	キリング中等学校近くのマーケット(市場)に立ち寄ってくださり、ぐるりと回ることができた。女性と子どもが多い印象で、食材だけでなく文具や靴、日用品などさまざまなものが揃う。モシへの道のりですれ違う車は大型トラックが多かった。道路の周囲はほぼトモロコシ畑が広がっていた。道は整い、揺れはほとんどなかった。
8月12日(水)	隊員との懇談会	地元を知る現地の隊員が食事会のレストランを決めてくださり、まさに現地に入ることができた気がする。隊員としての現地での生活、隊員になるきっかけ、ご家族のこと…「あれは?これは?」と気になることを直接うかがうことができた。ウガリも美味しくいただいた。
8月12日(水)	本日のふりかえり	キリング中等学校で行った「あなたにとって、幸せに必要なものは?」アンケートの結果で“教育”への票が多かったのは印象的であった。子どもの本心をついているのかを含め、“教育”に票を入れた子ども達の裏側に興味が出た。学校訪問があったことで、自分のクラスの子どものことを思い出した。
8月13日(木)	カラंगा小学校 植松隊員活動視察	校舎の壁に、植物のつくりや心臓などの臓器のつくり…などが大きく描かれていた。壁も学習のための道具の一つになっていることに驚いたが、誰もが目にする場であり有効な手段にも感じた。予防接種の呼びかけポスターも貼ってあった。子ども達はとても人懐っこく、私たちも自然に笑顔になる。まず、三つのグループに分かれて授業を参観した。途中、授業をされている現地の先生のご厚意で10分間の時間をいただき、手遊びや歌など直接交流する機会があった。その後、5年生のクラスに入り、交流した。「何をしているときが楽しいか?」を絵や言葉でかいてもらった。
8月13日(木)	警察学校 江波戸隊員活動視察	警察学校長へ挨拶を終え、学校の敷地内を案内していただいた。広い敷地にまた驚いた。警察学校の関係者の居住スペースはもちろん、教会、学生寮、食堂…もあり、訓練を受ける警察犬、馬もいた。新入生は18日に入学するというので、学生はおらず、ナショナルチームの

		柔道合宿が行われていた。日本人の名前が入った柔道着を着て、「いち、に、さん…」とカウントをしながら練習に励む彼らの姿が印象的であった。
8月13日(木)	本日のふりかえり	カラング小学校の子ども達との交流をしながら、「自分のクラスの子がここにいたら、どんな様子だろう？」と想像して、わくわくした。現実的には難しいことだが、子ども同士の交流が叶うのなら、それは確実に素敵な時間になることは間違いなさそうだ。警察学校の見学の中で、実際に練習環境を目にして柔道畳の必要性は実感できた。これを子ども達を巻き込んで発信することができればいいと思うが、現実的には難しいことなのかもしれない。ただ、可能性の一つとして考えることも、私たちにとっては大切なことなのかもしれない。
8月14日(金)	タンライスプロジェクト視察	まず、KATCまでの道のりに驚いた。これまでは整備された道で安心してきっていた部分があったが、ここにきて砂ぼこりの舞う、でこぼこ道で、アトラクションに乗っている気分であった。写真などでは見ていたものの、パッと目の前に広がる水田風景は、「本当にタンザニア？」と思ってしまうほどであった。そこまでの砂ぼこりの道のりや周りに広がっていたサトウキビ、トウモロコシ畑などとは全く異なる景色だった。それだけに、直前に大泉さんから説明のあったローアモシ灌漑地区事業のプロジェクトの偉大さ、努力と苦労は十分に感じられた。
8月14日(金)	専門家との懇親会	大泉さんご家族と夕食をご一緒することができた。仕事内容の詳細、ご家族のこと、お子さんの学校のこと、普段のタンザニアでの生活のこと…など、気になることをその場で次々にうかがった。また、ふり返りの中で、奥さまからも象牙の話があったと聞き、興味深い。
8月14日(金)	本日のふりかえり	キリマンジャロ州の行政担当長を訪問した。「学校で教科書や先生の数は足りている。子ども達の成績も良くなってきている。机やいす、先生たちの家が必要だ。」の言葉が印象に残っている。自分が学校見学で感じたことと温度差があった。ただ、これは私の感覚（日本と比較してしまう部分も含めて）であることも忘れてはいけないと思った。
8月15日(土)	タンライスプロジェクト農村視察	マボギニ村のバルタザーリさんの家族の家にお邪魔した。車を降りた瞬間は「どんな半日になるのだろうか？」と不安もあったが、家族に会うとあっという間に時間は過ぎていった。特に、お母さん達女性の目線で過ごした。実際に一緒に作業をさせていただいたのは食事作りが中心であった。私たちが訪問させていただいたこともあり、普段より力を入れて準備して下さったこともある

		<p>のかもしれないが、歓迎のチャイの時間が終わると、10時くらいからお母さんたちは食事の準備に取り掛かった。そこから14時近くまで、火を扱う小屋の中は暑く煙たい状態が続いた。その中で火や鍋の様子を見たり、お皿を洗ったり運んだりして常に動いていたように思う。作っている過程も見みせていただき、ご家族の温かいお気持ちとともにいただく食事はとても美味しかった。</p>
8月15日(土)	市内視察	<p>事前研修の中で知った障害者の方が製作に携わっているという皮製品を扱う店(お土産屋)を出発し、その後小グループで市場を回った。女性や子どもが多くいる印象である。所狭しと隣り合う店は活気があり、見ていだけでもとても面白い。しかし、現地の人と直接やり取りをするにはとても勇気がいることだと感じた。</p>
8月15日(土)	本日のふりかえり	<p>マボギニ村で田植えをしている女性たちの姿が印象的であった。田植えの実践部隊(下請け)のような形で作業をしていた。一区画の田植え作業の賃金が4万タンザニアシリング(日本円で24,000円)、昨日・今日の2日間かけて3人で作業をしているため賃金は三等分され…と考えると、一日当たり約4,000円(日本円)とのこと。父親は亡くなり、4人の子どもがいる中で生活と考えると、決して良いとはいえないように感じる。田植え作業はかなり昔から行っているようで、その知識はかなり豊富であった。</p>
8月16日(日)	ダルエスサラームへ移動	<p>はっきり見えるキリマンジャロ山に見送られるように、国内線でザンジバル島を経由してダルエスサラームに移動した。離陸後はキリマンジャロ山、ザンジバル島が近づくと海…さまざまな景色を楽しむことができた。ザンジバル島で飛行機を降りることはできなかったが、西洋人が多く、キリマンジャロと同様に観光業が栄えていることを実感した。</p>
8月16日(日)	専門家との懇親会	<p>ダルエスサラームの海に面したホテルで、タイ料理を食べながら TANESCO プロジェクトにかかわる専門家に話をうかがうことができた。プロジェクトについて、さらにそれぞれの方が担当されている業務について、タンザニアの人と共同で作業をする中で感じられていること、大切にされていることなどを具体的に聞くことができた。</p>
8月16日(日)	本日のふりかえり	<p>昨日の各村での体験の共有の後、小学校グループと中・高校グループに分かれて授業プランについての意見交換をする時間をもつことができた。ここまでの研修の内容をじっくりとふり返る時間になり、貴重な時間であった。自分一人では、何か理由をつけて後回しにしてしま</p>

		う部分もあったため、良かった。また、カランガ小学校でのアンケートの様子から、18日のムランディジ小学校では「あなたの好きな（よく食べる物）食べ物は何ですか？」に変えることでまとまった。
8月17日(月)	タンザニア電力供給公社(TANESCO)プロジェクトサイト視察	「相手を信じること」「相手と対等であること」を大切にダルエスサラームの街の人たちの生活が少しでも良くなるようにと働いている日本人がたくさんいることを知った。日本でも見学したことのない変電施設・さまざまな機械を実際に見て回ることができたことで、「日本の技術は本当に素晴らしい」と改めて思った。そして、その建設現場で現地のタンザニアの人が働いていることはよい構造であるように感じた。
8月17日(月)	市内視察・教材購入	ティンガ・ティンガ村に向かう海岸沿いを走る車窓からの景色は、ダルエスサラーム中心部とモシ・キリマンジャロとも異なる新しい眺めだった。ティンガ・ティンガ村で絵を描く作業(仕事)は男性ばかりが担当していたのが印象的だった。その色づかいやデザインが素敵で魅力的だった。
8月17日(月)	本日の振り返り	これまでの訪問先、そして今日のTANESCOでの話を聞いて、日本だけではなく、たくさんの国がそれぞれのやり方でタンザニアを支援していることを実感した。特に、日本の変電施設の中でもスウェーデンの製品が使われている…など、私の想像を超える現実があった。また、同じ電力に関係する分野で、それぞれの国が独自のやり方でタンザニアにかかわっているということは良いようにも感じられたが、国によって型が異なる製品を使っていることなどを聞くとすべてが発展のためになっているのかは疑問に感じた。
8月18日(火)	ムランディジ小学校三隅隊員活動視察	ダルエスサラームから西の方へ移動し、ムランディジへ向かった。内陸国につながる重要な道路であったようで、車の往来が激しかった。中でも大型トラックとすれ違うことが多かったように感じる。途中、日本が支援して作った歩道橋、中国が作った(現地の人が働き、現地の材料で作る)カンガの工場を見たり、いくつもの町を通り過ぎたりしていく中を見落としてはもったいないと眺めていた。ムランディジ小学校では、特別教育(特別支援教育)の現場を見せていただき、交流させていただき、子ども達一人ひとりと向き合うことが大切なのは、タンザニアも日本も何の変りもないことを改めて感じた。今回の学校は、これまでの経験があったからか、これまでで一番ソーラン節も盛り上がったように感じた。子ども達も一緒にかけ声をかけてくれた。また、この学校でも校歌を披露してくれて、子ども達が堂々と歌

		う歌に感動した。
8月18日(火)	市内視察・教材購入	三隅さんが案内してくれた地元のレストランで、美味しいランチを一緒に食べた。学校の様子や普段の生活のこと、他の隊員との交流についてなど、さまざまな話を聞かせて頂くことができた。 大型ショッピングモール(スーパーマーケット)に連れて行っていただいた。市場などとは異なり、値段は記載され、外国のものもたくさん置かれ、とても不思議な感覚になった。レジ袋は最近有料になったらしい。
8月18日(火)	JICA 所員との懇親会	「いろいろな価値観があること」「アフリカにタンザニアがあること」など、日本で子ども達に伝えてほしい…という言葉がとても印象的で、これまでの研修のことを次々に思い出した。まさに「これから」が大切なのだと感じた。
8月18日(火)	本日のふりかえり	最後の夜ということで、今日は「漢字一字で表すと…」と一人ひとりがその字とともに理由も発表した。私は“次”を選んだ。毎日のように「次はなんだっけ?どこに行く?」と良い意味で次々に追われている充実した内容であったこと、そしてタンザニアで得たものを日本に戻ってから「次はどうする?」と投げかけられているように感じていることから、この字を選んだ。
8月19日(水)	JICA タンザニア事務所 報告会および記者発表会	新聞社の方たちも同席された報告会は緊張感が漂っていた。私たちを代表して、団長・副団長をはじめ代わる代わる英語でスピーチしたり、記者からの質問にも応答してくださったりして、とても頼もしく感じた。
8月19日(水)	在タンザニア日本大使館 表敬訪問	初めて日本大使館を訪問させていただき、緊張した。一つ一つ丁寧に答え、説明して下さる大使のお姿に徐々に緊張はほぐれた。いよいよ研修の終わりが近づいているのだと実感してきた。
8月19日(水) - 20日(木)	タンザニアから日本までの 移動中および日本到着	ダルエスサラームの空港に行った時間帯が他の飛行機の時間帯と重なっていたのか、入口を通るためにも長蛇の列であった。混雑していたこともあり、ゆっくりお別れができなかったのは残念であった。最後のふり返りミーティングはドーハ空港で乗り継ぎ待ちの時間帯で行った。研修全体のふり返り、今後の主な予定、「Xさんの手紙」の交流などを行った。